

2) 基調講演

「学社融合と生涯学習関連施設」 生きる力と体験活動（学習）

青森県教育委員会生涯学習課 指導主事 中嶋 豊

学社融合という言葉を知っているでしょうか？最近、特に言葉だけが一人歩きしている傾向があり、言葉の意味内容をよく知らない人がほとんどだと思います。

学校の現場を少し離れていて、実際の現場の様子はなかなか伝えられませんが、生涯学習課で取り組んでいる、施設を使った様々なプランの中で、特に学校の先生と子どもが取り組んでいるプログラム、モデル的な授業を展開している事例を紹介したいと思います。様々な施設で体験学習をすることは、実際に教員になった時に、子どもたちの体験活動をどのようなものにしていくかということにも結びつくと思います。

大学時代は、自分の出身が弘前市の隣の平賀町であったこともあり、毎日車で通っていました。その時遊びと思っていたことが、青森県の地理を勉強することにつながりとてもよかったです。

生涯学習課に配属される前に高校の教師をしていたことがありましたが、体験と呼べるものは実験室で実験をする程度でした。光合成の実験では、外へ出て様々な体験をすることは非常に大切ですが、実際にはなかなか出来ませんでした。大人になってからも、子どものころの体験は非常に新鮮なものに感じられました。高校ではクラブ活動や部活動で、多少は自然に触れる機会がありますが、実際の授業の中でやることは大変難しいことです。

そのようないきさつの中で学校の現場から離れて生涯学習課に配属されました。生涯学習課は、ほとんどが学校の先生、特に小学校の先生が多いことが特徴です。これまでの生涯学習の中心は、いわゆる社会教育として、学校を既に終えられた方が、学びたい、何かをしたいという時にお手伝いをする流れでありました。しかし、大人だけではなく、大人でも若い人、年配の方々、子どもたち、少年、青年といろいろな世代の年齢層の人たちが一緒になって、1つの学びを始めよう、あるいは学びの中から何かを得ようという方向へ、生涯教育の考え方が変わってきています。

教育には、幼児教育、青少年教育、また家庭教育、高齢者教育など様々な分野があります。私が現在担当している分野は、ライフステージの1部分の教育ではなくて、生涯教育全体の中で様々な年齢層で幅広く生涯学習を広めていこうというものであります。

学社連携・融合という言葉がありますが、言葉に惑わされることなく、要するに学校教育と社会教育の2つがよりいっそう手を携えて、様々な体験活動を展開させていこうというものであります。

さらになぜ、学社連携・融合が必要なのかという問題の背景には、学生の皆さんが参加しました事業に重ね合わせるところがあります。

子どもたちの「生きる力」をはぐくむため、様々な体験学習の実施や地域素材の活用な



ど、学校教育と社会教育が一体となった取り組みが求められています。「生きる力」とは、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などがありますが、地域においても、主体的に学ぶことが出来る環境作りを進める上で、「生きる力」は、重要な要素になっています。

学校周辺の地域には、たくさんの名人、達人がいます。その人たちは、学歴や仕事でもなく、自分が人生を通して進めてきた趣味や様々な取り組みが立派な財産となっています。学校の先生が及ばない知識や教養をたくさん持っています。その方たちが持っている知識を地域の中で埋もれさせるのはもったいない、せっかくだから学校へ来てもらったり、学校の方から地域の公民館へ出かけて行ったりして、その場その場で一緒に昔の遊びや様々な歴史の勉強をやっていくことは出来ないだろうかという流れが、学社連携・融合という言葉の考え方につながってきています。県内のほとんどの公民館で勉強されている多くの方は、仕事をリタイアされて、趣味、教養のためにいそしんでいるのですが、その勉強意欲は並大抵のものではありません。子どもたちは、勉強を数年間、教わるわけですが、教室の中で先生が問いかけ、生徒がそれに反応を示すという状況と比較すると驚くほど凄いです。生涯学習課が、そのような人たちを対象に開講している講義、講座では、先生もたじたじになるほどの内容が深い質問をすることもあり、いつも感心させられます。そういった人たちと子どもたちが一緒に何か出来ないかと考えています。また、「生きる力」という上で、学校教育、社会教育がどのように結びついていくかということを考えながら仕事を進めているのですが、こういった流れの中にはいくつかの問題点があります。

学校現場の中で、実際に先生方が地域の方と授業を組むことになると事前の準備が非常に大変なものとなります。特に、学の外へ出で行くとなれば、子どもたちの安全など注意すべき点がたくさん浮かび上がってきます。そういった状況では、1人の先生で全体の体験が出来ないということになります。そのあたりを学校の先生という立場、社会教育の立場というお互いの立場を踏まえて日ごろから話し合いを深めることが大切だと思います。具体的には、準備にかかる負担をもう少し軽くしてあげることが出来ないかということが課題の1つになっています。

しかし、実際にはかなり難しく、1つの体験を行うにあたってかなりの準備時間が必要なため、年間の計画の中で様々な体験活動を行う場数がそれほど多くないことが現状です。本来であれば、様々な教科、授業の中で体験というものがたくさんあれば、1番よいのですが、実際はなかなかそうはいきません。しっかりと計画、準備をすると1年間に1~2回、ある一定の期間の中で実現できますが、継続した体験にはなかなか結びつきません。

こういったことが学社連携・融合の考え方を進めていく上で課題の1つとなっています。ただ、体験活動を行うにあたって、少年自然の家などの施設では1日中びっしりとプログラムが組まれており、おおらかで自由な雰囲気での活動とは少し様子が違います。そのような施設でも、もっと時間の余裕を持って子どもたちに考えさせながら次のプログラムに進めていきたいと思っていますが、訪れる期間が限定されているため、その中ですべてをこなすためには、どうしても過密なスケジュールになってしまいます。近くの学校であれば、季節ごとに施設を訪れて自然の変化を観察できますが、県内には少年自然の家が、八戸、梵珠、下北の3箇所しかないため、施設に行くのにかなりの時間を費やすためなかなか難しいです。

しかし、最近、考え方が変わってきて、少年自然の家でなければ体験活動が出来ないのか？たとえば学校の中で小さな自然発見が出来ないか？という方向に進みつつあります。小さな取り組みから始めて、子どもたちの中でもっと勉強したい、もっといろんなことをしたいという意欲が出て来た段階で、まとめて施設へ体験活動をしに行こうという流れになってきています。少年自然の家でも、時間に余裕があれば、施設の職員が施設を飛び出して学校へおじゃまして、学校の先生方ではどうしてもまかないきれない自然観察をサ

ポートしたりします。そういうことで、学校の中での自然観察の幅も広がり、出前授業の展開につなげていくのです。最近では、図書館、郷土資料館、技術館など公共の施設の方々にも学校へ来ていただいて、出前授業を始めている学校もあります。

次に、学社融合の視点による体験活動のメリットをお話すると、まず学校教育の充実が挙げられます。学校は、生涯学習・社会教育関連施設や地域住民が準備した学社融合による体験活動の学習プログラムを導入することができ、学校教育の一層の充実が可能となります。次に、社会教育の活性化という観点で見れば、学校が地域住民の学習の場として開かれ、社会教育施設等を利用した児童生徒の体験学習が活発になることによって、参加した地域住民の学習意欲や教育力が高まることが考えられます、それに伴い社会教育施設の利用が増加し、同時に学習プログラムの開発や施設職員の資質向上機会の増加が見込まれるので、社会教育全体の活性化につながります。

学社融合の視点による体験活動として、学社融合プログラム、公民館・地域人材による学習活動の支援、公民館・地域人材、図書館による学習活動の支援による学習活動の支援についての例があります。あくまで参考にして下さい。また、この学習活動を通して何を考えるのかを子どもたちに伝える必要があります。

青森県には、67の市町村があり、青森県内に25箇所の図書館があります。つまり、すべての市町村に図書館があるわけではありません。本はけっこうあります。これからは、調べの学習に役立つと思います。

普段から密接な活動をしている田子町立田子小学校の第5学年の有名な総合的な学習についての例があります。学生のみなさんも行った岩手県青年自然の家での活動があります。今は、自然の家で国際交流ができるほど、学校、地域に進出しています。学社融合と生涯学習関連施設、湾岸ネット、学社融合推進モデル事業実施計画、弘前市立豊田小学校、弘前大学理工学部の野田助教授によるピオトープの例もあります。

以上のように説明してきましたが、これからの大学学習に少しでも役立ててくれればうれしいです。これで私の講義を終わりたいと思います。ありがとうございました。